

8月はキャンプの日々と夏休みで、非日常の日々を過ごしてリフレッシュすることができました。マタイ福音書の解き明かしを再開します。今日は特に「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。」という言葉に耳を傾けたい。

この言葉の恵みを思い巡らしていたら、サマーデイズでのエピソードを思い出した。サマーデイズは全国高校生キャンプで、改革派に所属する高校生たち（中三から）が集まる。今年は例年より少なかったが、それでも40人近い子たちが集まる。その中には高校三年生もいる。三年生ということは、受験勉強真っ最中という子が多い。でも受験勉強を差し置いてでも、三泊四日のキャンプに絶対来たかったと、強い思いをもって集まってくる子が、毎年けっこういる。そして、やっぱり来てよかった。心がぐちゃぐちゃになっていたけど、まっすぐにしてもらった。勇気ももらった。明日からがんばりますと、本当にいい顔になって帰っていく。それは、この三泊四日を通して、イエス・キリストに出会い、仲間に出会うからです。受験というのは、多くの高校生たちにとってこれまでの人生最大の試練であって、苦悩が深まる時です。自分の弱さと向き合わねばならない時です。焦ったり、苛立ったり、大きな壁から逃げたくなったり。そういう自分の感情を自分でもうまくとらえきれないままに、心がバラバラになっていく。あれこれ口やかましい親と衝突しては、やりきれない悲しみに胸を痛める。人間関係に躓きを覚えている子も割合多くいます。受験勉強が始まると、変な競争意識が生じたりして、友達だと思っていた人の醜い側面に気づかされて・・・ということをよく聞く。このように受験期というのは実は、人間の闇、自分の闇に気づかされる、霊的に大きな悔い改めの機会でもある。ある男の子が言いました。「心がカラカラに渴いていたけど、満たされました。イエス様は最強だって改めて確信しました。明日からがんばります。」サマーデイズなどのキャンプというのは、長いマラソンの給水所のようなものですから、そうやって、イエス・キリストから命の水をもらって、苦しい上り坂に向かっていくわけです。

もちろん、そのようにしてサマーデイズに参加する受験生がみんな合格するわけではありません。中には浪人してしまう人だっている。だから、学校や塾の先生からすれば、そんなもんに行かせるわけにはいかないと止められることも多い。大事な夏休みに四日間も勉強から離れることは、先生からすれば心配で仕方ないだろう。今回も、どうしても来たくて二日目の夜から参加できた子がいるが、学校の先生からひどい言われ方をされたと泣いていた。親もまた先生に同調することが多い。クリスチャンの親であっても、勉強のほうが大事だといわれる方が多い。先に申し上げましたが、高校生、特に受験期の子どもたちは霊的にカラカラに飢え渴いています。そして自分の罪、人間の闇を見つめ始めている、その意味で悔い改めの大きな機会であるのです。でもそのことを見落として、今は勉強するべき時だ、教会のキャンプはその後でいくらでも行けるという論調の方がいる。挙句に、サマーデイズに行くのは君が遊びたいだけだろう！教会に行きたがったり、教会の仲間や牧師と話をしたがったりするのはお前が逃げているからだと・・・そんな風に言われていることさえあるようです。

私はこのことを、けっこう本質的な問題だと思っているのです。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」という言葉を、私たちがどう受け止めるかの問題だと思っています。確か

に、サマーデイズに来る子どもたちが、ひとときの魂のオアシスを求めてキャンプに集まっているという面は否めないと思います。でもそれは決して、彼らがさぼっているわけでも、逃げているわけでもない。いや、私は逃げているとしたってかまわないと思う。神は私たちの逃げどころと、詩篇でも歌っているのだから、神の翼のもとに逃れよとすすめられているのだから、逃げてきたっていいのです。ただ、「逃げる」という言葉が、「目の前の現実を無責任に投げ出す」という意味で用いられているならば、彼らは決して逃げているわけではないのです。そんな風に逃げるためならば、キャンプには来てはいけない。そうではなくキャンプに来るのは、その現実立ち向かうためです。戦いの構えを整えるためです。サマーデイズに来る子どもたちは、そのことをよく知っています。大人は、特に親や身内はいつも若者たちを侮って、何も分かっていないと子ども扱いしますが（過干渉）、若者たちは、よく分かっているのです。受験という現実から逃げたいと、よく分かっている。だからこそ、立ち向かうために、自分の揺らぐことない拠り所をしっかりと確立したいと願っているのです。イエス・キリストという方を、自分の人生の主としてしっかりとお迎えしたい。自分の人生に軸を通してもらいたい。そして、この主を共に見上げ、共に主の道に従っていこうと励ましあえる、本当の友達に出会いたい。同世代のクリスチャンとの友情を確認して、祈りあいながら戦いに向かいたい。そんな激しい魂の求めをもって、彼らは集ってくるのです。私は、そんな若者たちの姿に、「何よりもまず神の国と神の義を求めよ」という真摯な信仰者の姿を教えられる思いがするのです。

「何よりもまず神の国と神の義を求めなさい。」これは、思い悩むなという教えの中で与えられている命令です。鳥を生かし、花を育む命の神、天地万物を創造された神、死後の世界をもその手ににぎっておられる人知を超えた方。この方が、イエス・キリストの十字架と復活の救いのゆえに、恵みの神として、やさしい父として、あなたを見守ってくださる。この神に信頼して、委ねてしまいなさい、それがここでのイエス様の教えであります。父なる神が必ずあなたに最善を備えてくださる、だから思い悩むのはやめなさい。思い悩む代わりに、神の国と神の義を求めなさい。そうすればこれらのものはみな加えて与えられる。「何よりもまず」、これが第一に考えること、心の中心に置くべきことだと示される。

考えてみますと、聖書の言葉遣いでは、「思い煩い」とは心が分裂したさまをさすということがよく言われる。あれも、これもと、色んなことを考えすぎて、心が乱れているさま。そう思うとここでイエス様がしてくださっていることは面白い。考えなくていいような色んなことを置いて、本当に第一に考えなければいけないことに集中しなさい、と言っておられる。そうやって、色々考えてバラバラになっている心を、一度全部リセットして、一つのことで埋めてしまうということを教えてください。

そしてその第一に考えるべきことは、神の国と神の義を求めること。神の国を求める。それは神の支配を求める。この私という存在の中で、そしてこの地上世界全体が、神の慈しみ深いご支配で満たされますようにと願い求める。そのようにして神の支配が満ちることこそ、私たちの最大の幸福があるのですが、想像を超えている。その反対を考えてみるといい。罪深い悪しき思いで私が、世界が満たされる・・・その悲惨な世界にはっきりと背を向けて、神の愛と平和がこの身に満ちるように求めるのです。神の希望が世界に満ちるように求めるのです。

そして、神の義を求めること。これは神様と関係修復してもらうこと。私たちというのは本当に傲慢ですから、神様が自分を愛して当たり前だ、などと思いがちだが、とんでもない。私たちが神とのあいだの関係は修復不可能なほどにこわれているから、愛されることなど考えられない。呪いと怒りの対象。修復が必要。そのために必要なことは、私たちの身代わりとして十字架で死んでくださったイエス・キリストを、自分の救い主として受け入れるということ。人生の主として受け入れるということ。

そのようにしてイエスを信じる者を、神はもう呪うことなく、ご自分の子として愛して愛しぬいてくださる、どこまでもその翼の元で守り抜いてくださる。私たちはそのように信じていいのです。この神との関係修復を、「何よりもまず」真っ先に求め、神の愛と恵みを確信させていただく。わたしはもう何がどうあろうとも神に愛されている、この喜びで心をいっぱいにさせていただく。これを第一にする、心の中心に置く。それが「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」ということの意味です。そうして神との関係をしっかり確立し、歩むべきキリストの道を見定めたのなら、もう余計なことを考えて思い悩む必要などないのです。

この教えは、もちろん受験生だけではなく、わたしたちすべてが聞くべきものです。神との関係の確立、これが第一に、心の中心に置くべきことです。この土台がしっかり据えられて、心が平安に保たれているならば、どんな戦いをも強く雄々しく戦い抜くことができます。私たちはこの日曜日の礼拝にも、神の国と神の義を求めて集まってきたはずですが。そんな時間があるなら、勉強しなきゃいけないだろう、他にやるべき仕事があるだろうという声を聞きながら、集ってこられた方もいらっしゃるかもしれません。自分自身でもそういう疑問を覚えて、礼拝を守るということに積極的な意味を見出せないという方もいらっしゃるかもしれない。でも、私はしばしば申し上げます。私たちが礼拝を守るのではなく、礼拝が私たちを守るのです。神が私たちを礼拝に招いてくださって、ご自身との関係を確立してくださる。神の愛と恵みの確信を、この魂に深く深く打ち込んでくださる。だから私たちは、すっきりとした一筋の心をもって、また月曜日からの戦いに向き合うことができるのです。このように申し上げるのは、今礼拝になかなか出席することのできない方々を責めるものではないということ、どうかくれぐれもご理解ください。やむをえない事情で、礼拝を第一とできない時もあります。それも、神が定められた時です。私はただ、私たちの命はどこにあるのかを、確認したかっただけです。何よりもまず、神の国と神の義を求め、イエス・キリストの名のもとに集まりひざまずくならば、人知を超えた平安によって私たちは守られ、どんな荒波にもたじろぐことない不滅の希望に生かされます。ここに私たちの命があるはずですが。

最後に34節を読みましょう。「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」明日のことまで思い悩むという言葉聞いて思い出したのが、ルカ福音書12:13からの愚かな金持ちのたとえです。大きな倉を建てて収穫をしっかりと貯えて、これから先何年も安心して生きていくという計画を企てるのですが、神はそういう彼に対して、今夜お前は死ぬと宣告されるという。こういうたとえ話によって「ありあまるほど物をもっていても、人の命は財産ではどうすることもできない」ということを、イエス様は教えようとしてくださった。私たちというのは、命をも握っておられる

神の前で、それほど無力なはかない存在であると、教えられています。明日のことは分からないのです。一秒先のことだって分からないのです。前回お読みした言葉の中にもありました。「あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。」・・・だれにもできないのです。それが、人間の無力さです。神への完全な信頼は、この自分の無力さの徹底的な自覚と裏表ひとつのことです。私たちは自力では、寿命を一秒だって延ばすことのできない無力なものです。でも、そのことを認めて、参りましたと降参するなら、そういう打ち砕かれた心を、神は必ずすくいあげてくださいます（詩篇51：19）。そのようにして、神の大きな手の中に、無力な自分のまま飛び込んでいく。それが、「ゆだねる」ということの始まりだと思います。

一秒先も見通せない私たちです。だから、先のことまであれこれ考えずに、今与えられている一秒を、一時間を、一日を、神に信頼して精一杯生きることです。「その日の苦勞は、その日だけで十分である」という言葉は、そういう意味だと思います。ここは私の理解では、「その日の苦勞は、その日丸一日かけて苦勞するに十分なほど与えられている。」だから、明日のことなど考える余裕は本当はないはずだ、というのがイエス様の主旨なのです。その日に負うべき苦勞について、もっともっと真剣に考えなさい。もっと十分に苦勞しなさい。それはすなわち、その日を一生懸命に生きなさいということです。

こういう最後の言葉を見ると、イエス様がただ楽観的というだけではなかったということがよく分かる。ともすると私たちは言います「神様が何とかしてくださる、だから何とかなる」そうすると人は言いたくなるわけです「何とかならない。人生はそんな甘いものじゃない。自分で何とかしなければどうにもならない。」しかし、私たちはそういう意味で「何とかなる」なんて言うのじゃないわけですね。極端な話、遊んでいても大丈夫なんてことはイエス様はまったく言うておられませんし、私たちだってそんなこと思っていない。むしろ私たちがイエス様から教えられることは、この今日という日に、神から自分に与えられた命の責任を全うするという積極的な姿勢です。今日どんな苦勞が与えられようとも、試練が与えられようとも、逃げることなくそれを背負いきる強い思いです。

ですからキリストを信じる者は、そのようにして、自分に与えられた苦勞に正面から取り組む。そういう意味では「何とかなるわけない」と必死で頑張っている人と同じです。でもキリストを信じる者は、じたばたしません。もう思い悩むことはありません。それだけが違いです。神が必ずすべてを整えてくださる、その平安の中にいるからです。

楽観的ではなくて、前向き。この二つの言葉は似ているようで全然違う。キリスト者は究極のプラス思考。どこまでも前向きです。それは、神が私のために、独り子を与えてくださるほどに愛して下さっていることを知っているからなのです。一秒先も見通すことのできない、無力な、小さな自分です。でもこの私のために、神は独り子を与えてくださった。わたしは、もう何がどうあろうとも神に愛されている、この喜びで心をいっぱいにしてください。この喜びを第一にして、心の中心に置いて、また明日からの戦いに向かっていきましょう。